理学部は今

No.19 March 2008
理学部のホームページ　http://www.sc.niigata-u.ac.jp

2007年　新潟県中越沖地震における理学部の活動

2007年新潟県中越沖地震の発生当日から、理学部学生・院生・教員による調査が行われた。JR柏崎駅構内で脱線した越後線車両（左上）。刈羽村の道路崩落（右上）。柏崎市内の噴砂を伴う地割れ（左下）、排水溝を目印にした測量によると地盤は水平短縮しておらず、地震断層と見なせない。長岡市の活断層露頭（右下）、短縮により地層が逆Z字型にずれている。ずれは過去の“中越沖”地震で生じた可能性がある。また将来の巨大地震発生が懸念されている。
（文責　小林健太）

Contents

■学科ニュース
数学科……2
物理学科……2
化学科……2
生物学科……2
地質科学科……3
自然環境科学科……3
■附属臨海実験所ニュース……3
■退任職教職員紹介
物理学科　教　授　小林迪助……4
物理学科　教　授　金子恒雄……4
物理学科　准教授　木山善隆……4
総務第二係（物理学科）　西沢順子……4
生物学科　教　授　渡辺勇一……5
自然環境科学科　教　授　山岸宏光……5
総務第二係長　笠巻高夫……5
■卒業生からの言葉……6・7
■改修工事……8
■これからの行事予定表……8

発行／新潟大学理学部広報委員会・理学部後援会

学科ニュース

数学科

昨年11月28日、理学部講演会の援助による平成19年度第2回「数学科特別講演会」が新潟西高校教諭の清水みどりさん(昭和63年卒業)と株式会社アイネットの森陽美さん(平成18年卒業)のお二人をお招きして行われました。清水さんは多忙化する教育現場について、自らの体験をもとにした話しをされました。教員志望の多い本学科の学生にとって実体験にもとづいた講演は大変有意義なものでした。また、森さんは、一般企業への就職活動における心構えや就職後の研修期間の重要性について話されました。講演後、様々な質問が出され、活発な意見交換が行われました。12月11日、13日、17日に、それぞれ2年生、1年生、3年生との対話集会が行われました。学生側からは、主として授業に関する様々な質問や要望が出されました。本年2月8日には「修士論文発表会」が行われ、15名の博士前期課程修了予定者が2年間の研究成果を発表しました。修了予定者の部分は本学科の卒業生ですが、その成長ぶりには目を見張るものがありました。現在、学生定員確保と大学院教育・研究の更なる充実を目指して、大学院自然科学研究科の改組が検討されておりますが、本学科は基礎科学分野の一翼を担うという方向で検討が進んでおります。

尚、来る3月16日に、平成19年度春のオープンキャンパスが行われる予定です。学年末で何かと多忙な中、そのための準備作業が行われております。

物理学科

物理学科は、一昨年の「アインシュタインLove」展にひきつづき、昨年もまた大きな展覧会の開催に力を注ぎました。昨年11月17日から12月2日まで県立自然科学館で催された「湯川秀樹・朝永振一郎生誕百年記念展　素粒子の世界を拓く」です（主催:新潟大学理学部、共催:自然科学館、日本物理学会新潟支部）。中間子理論の業績によって日本で最初にノーベル賞を授けられた湯川博士と、量子電気力学の業績で2番目のノーベル賞日本人学者となった朝永博士は、中学、高校、大学の同級生で、その後もずっとライバルとしてかつ研究仲間としてお互いに強く影響しあい切磋琢磨して、新しい学問を切り拓いたのです。両博士の業績と生き方は、物理学に携わるものにとっては憧れであり大きな目標です。今回の展覧会では、30数名の物理学科4年生・大学院生が展示解説員などとして科学の広報と啓蒙に大きな役割を果たしてくれました。高大連携企画も併せて実施し、市内5校から80名を越える高校生が展覧会で学びました。展示の一角に設けた新潟大学コーナーは子供達にも大変好評でした。学科では見学ツアーも企画し、1−4年生までの大部分の学生が展覧会に参加しました。両博士の息吹を身近に感じてもらえたようです。開幕日前日には、両博士と長年の親交をもち展覧会の全体企画者の一人でもある小沼通二先生を新潟大学にお招きして全学向け講演会「若い人たちへ　湯川・朝永のメッセージ」も開催しました。生き生きと語っていただいた、物理学上の業績、人となり、そして平和運動にも活躍された両博士の姿に、200名を超える学生、教職員が感銘を受けました。展覧会のキャッチフレーズにもなった両博士の言葉を紹介します。

未知の世界を探究する人々は地図を持たない旅人である（湯川秀樹）

ふしぎだと思うこと／これが科学の芽です／よく観察してたしかめ／そして考えること／これが科学の茎です／そうして最後になぞがとける／これが科学の花です（朝永振一郎）

化学科

第28回理学部コロキウムが2007年10月24日に行われ、昨年6月に化学科の新任教員として着任した生駒忠昭　准教授が、「分子間を渡り歩く電荷とスピンのランデブー」という演題で研究内容を紹介しました。新たに理学部スタッフとして加わった生駒先生の研究内容はコロキウム参加者にとって全くの未知であり、非常に興味深く聞き入っていました。

化学科の大学院組織である大学院自然科学研究科・自然構造科学専攻の化学分野では、修士論文発表会が2008年2月15日に行われ、修士2年の学生16名がこれまでの研究成果を講演14分、質疑応答4分のスケジュールで発表しました。多くの学生は長い学校生活に区切りつけ、4月より社会人となります。

理学部棟内の改修工事ですが、化学科の教員が関わるC棟西側の改修が2008年夏〜冬にかけて行われることになりました。この工事が終了しますと、これまで薄暗く（特に夜間と学生休み期間）混み合っていた廊下が明るい雰囲気となることと思います。更に化学科の学生実験室も新しくなります。完成の際には写真を掲載する予定です。

生物学科

2月7日、理学部合同講義室において、平成19年度生物学科課題研究発表会が行われました。この日演台に立ったのは4年生23名（写真）で、1年間取り組んできた課題研究の成果を口頭発表し、互いに活発な議論を行いました。これに先立つ2月6日には、同じく合同講義室において修士論文発表会が催され、8名の修了予定者による口頭発表が行われました。2年間の努力が伝わる、熱のこもった発表ばかりでした。卒業生、修了生の皆さんの今後の活躍を応援いたします。

3月31日、1989年以来生物学科の教育と研究にご尽力下さった渡辺勇一教授が定年退職されます。渡辺先生は専門の形態学・内分泌学のほか、全学教育での生物学基礎教育や生物学科における科学英語教育にも力を注いで下さいました。特に全学教育ではその取組が学生、大学から支持され、第一回教育褒賞（2003年）を受賞されました。生物学科はもちろん、数多くの学生、教員が渡辺先生の「双方向授業」の影響を受けたのではないかと思います。今後は出身地の札幌で生物学教育に携わる予定と伺っております。札幌でのご活躍をお祈りいたします。長い間ありがとうございました。

理学部の改修計画は、次年度最終段階を迎えます。改修後のC棟西側2階には生物学科の4研究室が移る予定です。

平成19年度生物学科課題研究発表会

地質科学科

2月6･7日の2日間にわたって卒業論文の発表会が行われました。24名の4年生が地球科学の様々な分野から課題研究の成果および地質科学科で培われた力量を余すことなく披露しました。また、2月8日には16名が修士論文を発表し、13日には2名の博士論文の公開発表会が開かれ、博士論文が提出されました。追い出しコンパ、卒業式、謝恩会と卒業生には思いで深い恒例の飲み会行事が続くことになります。

JABEE関連では10月末に中間審査が行われ、実地審査の結果内容では、さらに3年間の資格が認められることになりそうです。最終的な結果は3月になります。これを期に、さらなる本学科の教育の充実を目指して、様々な取り組みを考えて行きたいと思いますので、皆様のご支援をお願いします。

学科では学科長が変わります。2期2年間学科長を務められました田澤先生、ご苦労様でした。後任はこれから選出することになりますので、次号でお知らせいたします。

南極観測船白瀬の最終航海が報道されましたが、今期の夏季南極観測隊員として豊島先生が参加されました。残念ながら白瀬には乗らなかったそうです。来期の南極観測には志村先生が行く予定になっています。また、前号でも書きましたが、本学科の教員、院生や学生の交際的な活躍が続いて、来年度もそれ以上に活躍し、成果を挙げていくことが期待されます。

サイエンスミュージアムは12月の初めに学長や各部局長を招いて開館式典を行い、正式に公開されることになりました。是非、ご来館ください。火･水･木曜日10時から15時まで開館しております。

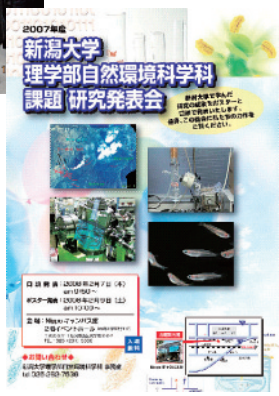
新潟は近年になく寒い日が続き、雪はあまり積もりませんが、降る日が多いと感じられます。皆様のご活躍と、ご健康を地質学科一同お祈りいたします。

自然環境科学科

課題研究発表会　盛況のうちに終わる

去る2月7日（木）と9日（土）の二日間、自然環境科学科の課題研究発表会が行われた。今回は　父兄や一般の方も気軽に参加できるようにポスターを作成し、新聞の折り込み広告で宣伝も行った。また、会場も新潟大学の正面にできた新潟日報キャンパス館のオープンスペースを借り切り、口頭発表とポスター発表を行った。初日の口頭発表では80名を超える参加者で会場が埋め尽くされた。

自然環境科学科では、毎年、物理･科学･生物･地学と自然環境に関する多分野からの発表のため、専門以外の人にも分かりやすいプレゼンテーションを心がけるようにしている。また、在校生には教員や先輩の研究を知る格好の機会である。とくに、ポスター発表では先輩の説明に熱心に聞き入る後輩たちの姿が印象的であった。4年生のみなさん、大変お疲れさまでした。



附属臨海実験所ニュース

附属臨海実験所では、毎夏、全国の国公私立大学の学部2～4年生を対象とした公開臨海実習を実施しています。昨夏は、米国･ニューハンプシャー大学からStacia A. Sower教授を協力教員としてお招きし、8月20日から5泊6日の日程で開催しました。全国の大学から参加した6名の学生は、Sower先生のご専門である比較内分泌学の講義を受講するとともに、実験所周辺の荒磯や砂浜海岸における海洋生物の採集や観察などに取り組み、海洋生物の系統分類や多様性に理解を深めました。この様な実習は、新潟大学に限らず、国立大学法人臨海臨湖実験所長会議をネットワークとして、主に理学系の臨海臨湖実験所（センター）でも開講されています（詳しくはホームページ:http://www.research.kobe-u.ac.jp/rcis-kurcis/station/plan.html　を参照してください）。各実験所に所属する教員や協力教員の専門領域により、系統動物学、発生学、進化学、生態学、生理生化学、分子生物学といった、多様で特色のある実習内容が盛り込まれています。理学部の学生の皆さんも、他大学で開催される臨海臨湖実習に参加し、他大学生との交流を深めながら、楽しく生物学を学んでみては如何でしょう。なお、平成20年度の佐渡臨海実験所での公開臨海実習は、東京大学海洋研究所の兵藤　晋先生をお招きし、8月18日より6日間の日程で開催する予定です。

磯採集に向かう実習参加者
（左:前列左から2番目がSower先生）と、
砂浜海岸で海洋生物の採集に取り組む
学生（右）

退職教員紹介

よき師よき仲間にめぐまれて

新潟に西堀、東堀の町名がありますが、1950年代半ば頃まで、その名前の通り、堀がありました。堀には運搬船が係留されていて、それを飛び越えて遊んでいました。私は本学理学部に1962年に入学しました。旧制高等学校の校舎だった旧理学部の建物には趣がありました。当時の先生方の講義にもそれぞれ個性的で風格がありました。私の師でした横田伊佐秋先生もそうした中のお一人で、言葉を選びながら考え考え語られ、時にはしばらく瞑想されておられました。そういうわけで話のつながりを理解するのに毎度苦労しました。先生の特殊関数の試験などはノート持ち込みで、何時間かけてもよいというたぐいのものでした。学生数が20人足らずの時代でしたから、親睦は十分に通じているにもかかわらず、さらに深めるためか、毎月のように円応寺会館に通いました。縦コンも良くやりましたので、上級生や下級生にも多くの友人が出来ました。仲間にはアインシュタインみたいなのがいて、前の晩に仕入れてきた知識を中講義室の黒板に書きまくり、「分かるか?」と得意がっていました。良き時代でした。今の学生等の間にも「場古研」のセミナーの類がもたれているようで頼もしい限りです。学生諸君の活躍を期待するとともに、理学部の益々のご発展をお祈り申し上げます。

小林迪助　物理学科 教授

新潟大学における一風景

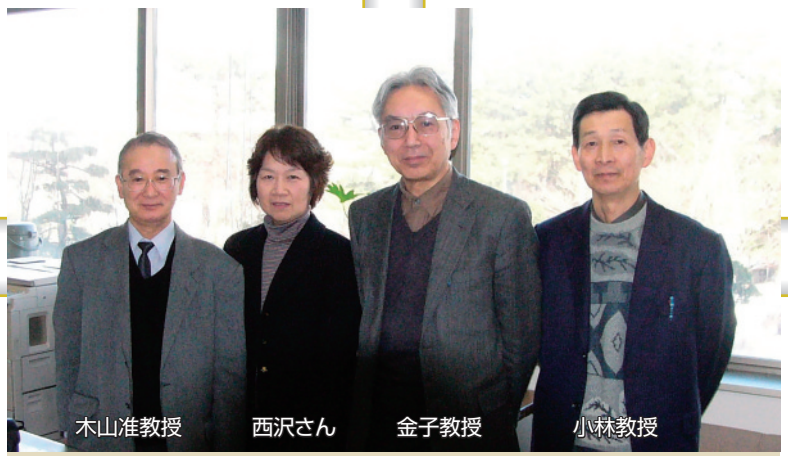
1969年大学紛争真っ只中の西大畑キャンパスに、理学部助手として赴任した。しかし、理学部との関わりは8年前にさかのぼる。つまり1961年理学部物理学科の学生として入学した。学部生時代の最大の出来事としては、1964年の新潟地震が思い出される。

1965年卒業の年に、理学部に大学院理学研究科（修士課程）が設置され、そこに1期生として入学し、研究者の卵としての第一歩をふみだした。1967年から1969年の2年間を東大大学院（博士課程、2年中途退学）で過ごした後、再び理学部に戻ったことになる。

1969年、下っ端教員であったが、多くの時間が大学紛争対策の為の会議に費やされた。幸いそれも収まり、翌年理学部は五十嵐キャンパスに移転した。移転当時のキャンパスは五十嵐砂漠と称されたように、風が吹くと砂塵が舞うような状態であったが、それも植樹された木々が育ち、数年後には落ち着き、研究するに相応しい環境になってきた。1995年、理・工・農による自然科学研究科がスタートした。

定年を迎えるにあたり、これまで私を育ててくれた理学部物理学科に深く感謝するとともに、物理学科が一層発展することを願っております。

金子恒雄　物理学科 教授



新しくなった物理学科事務室で体育館をバックに（2月13日撮影）

木山喜隆　物理学科 准教授

観測所とともに

理学部附属超高層大気光観測所の助手になってからの40年は長いようでアッという間でした。弥彦山頂にある観測所まではロープウエイで中腹へ、あとは徒歩。新雪の積もった山頂までの道のりは大変でした。道標（鉄柱）を頼りに登ります。道路幅は3〜4m幅、2m程陸側は雪庇と思いながら。元気の良い学生を先頭にお願いして登ったことも。学生達とは冬以外は屋上で装置の心地よい器械音を聞きながら、いろんな無駄話をしてきたような気がします。今から思えば、星空・宇宙と空間・生命体などがあまり話題にはならないで、むしろ人生・進路相談が多かったかと思います。私には夜光観測業務と教育研究があります。幸い観測業務にはお二人の技官の方が居られました。夜光観測、観測建屋の保守など細々とした雑多な業務をいやな顔一つせず働いて居られました。ありがとうございました。間もなく学園紛争が新潟大学にも飛び火。理学部の封鎖を解くために説得していた学生に殴られたことも。この五十嵐に移転してからも、観測所と共に歩んで来ましたが、これからは夜空を楽しみながら、のんびりきれいな夜空を求めて、さまよいたいと思っています。このような気持ちで退職できるのも大変お世話になった先生方、職員の方々のおかげと深く感謝しております。これからの物理学科の発展を楽しみにしております。

西沢順子　総務第二係

物理学科の事務職員として

1969年9月16日付け採用、大学紛争の真っ只中で、採用間もなく大学封鎖、機動隊が突入した日は休日で、私が日直勤務の予定日でした。突入のニュースを私は朝刊で初めて知り本当に驚き、急ぎ大学に行きましたが、その日は全員大学に集合、私の日直はありませんでした。西大畑キャンパスの忘れられない1日です。

移転までの約1年間は教授と同室で事務の仕事をしました。五十嵐キャンパスに移転し、当時回りは五十嵐砂漠と言われましたが、新校舎には学科事務室があり、私の仕事場は机・調度類すべてが新しく揃ったピカピカ事務室で、居心地よく落ち着きました。それから約40年を経て老朽化した建物は改修工事が進み（来年度には終わるとのこと）、物理学科事務室も、今年度の初めに新しく整備しまたきれいになりました。私が定年で退職というのも納得です。

学科事務室では、先生方、学生さんと身近で直接話ができるので、学ぶことも多かったし、色々教わりました。卒業生が立派な社会人・研究者として事務室を訪ねてきてくれるのは本当にうれしかったです。職場の同僚にも恵まれ、助けていただきました。皆さんに感謝とお礼をいいたいです。学科事務としての仕事は本当に楽しかったです。ありがとうございました。

流れる河の岸で20年

毎年繰り返し新しい学生を迎えているが、今年もこうして再び新たな学期を迎える季節が近づきつつある。この繰り返しを、あたかも流れる河を岸から眺めるような気持ちで、年々見てきたけれど、いよいよ私自身が水の流れに運ばれる身となり終点に到達することになった。

私が理学部に赴任したのは、丁度平成が始まった頃なので、今年で約20年である。学生・院生時代を含めると、暮らした大学はこれで4つ目となる。これまで過ごした他の大学に比べると、新大のキャンパスは、自然豊かな特徴を持つと思う。ある時は、頭上すれすれに太った雉が二羽飛ぶのに出会ったし、他の野鳥の声も多彩で野鳥図鑑（CD付き）と比べたが、ついに同定できなかった鳥達も少なくない。

この数年間は、法人化の諸制度のために、かっての悠々と研究・教育に打ち込めた「良き時代」は、去ったという思いはあるが、この大学の学生相手に最も油の乗った時代（教養改組が行われ、教養科目担当に一致して）を過ごす中で、授業の進め方を徹底的に追求し、借り物ではない自分独自のスタイルの授業方法を確立できた事が最大の成果だったと思う。今でも鮮明に思い浮かべられる学生達の顔を記憶に留めつつ、いよいよ河岸から去ろう。

渡辺勇一
生物学科　教授

最後の講義にかけつけてくれた
生物学科の教え子たちと

新潟大学での研究と教育を振り返って

山岸宏光
自然環境科学科
教授

本学理学部自然環境科学科へ赴任したのは、 1999年4月ですので、退官する2008年3月で丸9年となります。専門は地質学ですが、地すべりや崩壊などの発生要因などマスムーブメントを中心に、それらが土地利用されている中山間地の棚田などの環境変遷についても取り組み、それらを新しい技術であるGIS（地理情報科学）研究を学生とともに行ってきました。2004年の2大災害（7.13豪雨災害、10.23中越地震）、2007年の中越沖地震が発生して、関連する学会長もやっていたこともあり、これらの調査団長も何度か経験しました。2006年には、新潟大学災害復興科学センター防災部門長を、また、2007年4月には自然科学系付置の環境・防災GISセンター長を仰せつかりました。そして、このセンターでは自然科学管理棟に「空間情報実習室」を開設しました。

私が赴任して数年後には自然環境科学学科長を2年経験し、すぐ学科10周年を迎えてその記念事業の委員長を行い、増田学部長のもとで理学部で始めてスタディスキルズを立ち上げ、学外での卒論発表会を実施して、ポスター賞を出すなどを開始し、今も続いています。また、学科長在職中に、現在の大学院改組にも参画しました。法人化後の新潟大学は特色をもった大学としての道を歩み始めたと思います。私としても、全学の支援のもとに上記のGISセンターを立ち上げて、学内だけでなく地域の方々の協力で、国際会議や講演会・講習会を実施して、国内はもとより東アジアのこの分野の研究・教育拠点になる芽を作ることができたと思います。理学部においても、このセンターを活用して、他大学にない魅力的な理学部を生み出していただきたく期待をして退任の挨拶といたします。

鈍　感

総務係長　笠巻高夫

36歳のある日、気がついたら目が見えませんでした。
その期間は、2ヶ月続きました。
その2ヶ月は、闇ではありません。ただ見えないだけです。
周りの人は心配しているようでしたが、本人は意外と気にしないものです。
人の声は聞こえるし、風も感じます。
目は見えなく、不便ではあるけれども他はみんな前のまま。
目は見えなくなっても、命は残った。
そう思うと、人間、突然の環境の変化に対しても、意外と鈍感になれるようです。

皆さんのこれからの人生は、自分で承知して向かっていく道です。
突然の環境の変化で、有無を言わされずに入った人生に比べたら、この先どんな環境でも変化に対応できる能力を備えています。
さあ、挑戦してください。
わたしも退職後の人生、もらった残りの昨日と違う時間を、日に新たに日々新たに挑戦とともに歩みたいと思います。
ありがとうございました。

※今号でご紹介できませんでしたが、駒村　晃　技術専門職員も平成20年3月で退任となります。

卒業生からの言葉

小林加奈
（数学科）

～数学を糧に～

よく「何で数学を勉強するの?」と言われる事があります。これに対して、高校時代の私では、単に「好きだから」としか答えられませんでした。しかし、数学科を卒業する今なら、自信を持って「将来の自分の糧になるから」と答える事ができます。

その理由として、私は特に次の3つを重要視します。まず、問題に対して「なぜ」と疑問を持ち、その解明のために論理的な思考力を鍛える事。次に、その結果を発表やレポートとしてまとめる過程において、自分の主張を相手に分かりやすく伝える術を身に付ける事。そして、問題に対する答えができたという体験から、自分もやればできるのだ、という自信を付ける事、です。これらの事を特に実感したのは、4年次の数学考究でした。テキストを読み進める中で、粘り強く考える姿勢とプレゼンテーション力が鍛えられ、論理が通った瞬間の喜びを体験しました。

数学の大部分は、実生活には直結しません。しかし数学を勉強することで、私達はより豊かに生きていくために必要な能力を培うことができます。これらの力を鍛えながら、楽しく有意義に過ごすことのできた大学生活は、かけがえのない私の宝物です。

森田悠介
（物理学科）

～道の途中～

私は山が大好きで、学部四年間で沢山の奇麗な景色を見てきました。稜線一面に広がるお花畑や、夜テントから抜け出て見た、こぼれるくらいの星空は今でも忘れられません。そんな経験が出来た事に感謝しています。でも感動できるくらいのものを見るためには、重いザックを担ぎ、時には滑落の恐怖にさらされながらも地道に歩き続けなければなりません。あの丘の先には花の楽園が待っている事を信じ、一歩一歩踏みしめます。これって人生そのものみたいですよね。そんな事に最近気が付きました。本当に大切なものに出会い、感動するためにはただ努力するしかないと。

量子力学の創設者であるディラックは“It must be beautiful”真理は美しくなければならないと信じ、かの有名なデイラック方程式に到達しました。僕がいくらディラック方程式を眺めたところで、へんてこりんな記号にしか見えませんが、彼はさぞかし自分の方程式の美しさに感動した事でしょう。

私もいつかは、物理学という広大な山の頂に立ち、物理法則が織りなす色とりどりの景色に心動かされてみたいものです。でも今は、次見えるかもしれない景色に心躍らせながらひた歩いている道の途中です。

桜庭喜生
（化学科）

～ありがとう新潟～

秋田県出身の私は初めて見た新潟の街並みに圧倒されました。そして、自分の生まれ育ったところがいかに田舎だったかを知り、愕然としました。大学入試の日のことです。あれから早いもので、もう4年が経ち私の新潟での暮らしも終わりを迎えます。

この4年間を一言で表すならば、「駆け抜けた」それに尽きます。1年生の頃は人生で初めて始めたバイトに追われながら、親が朝起こしてくれる事の幸せさに気づき、2年生ではサークルに入り大学生活ならではの楽しみを知る一方、日々レポート提出期限に追われていました。3年生では過酷な学生実験も共に闘う仲間のおかげで楽しく乗り越え、自分の将来について考え、4年生になってからは研究漬けの毎日。と言いたいところでしたが、4年間でできた愉快な仲間たちのおかげで公私ともに最も充実した1年でした。

なんとなく化学科に入学してきた私ですが、卒業を迎える今、化学科に入ってよかったと心から思っています。化学を通じて、物事と偽り無く真剣に向き合う事を学びました。それを学べたからこそ、この4年間私は自分と向き合うことができ、人間として成長できたと思います。これも化学科のみなさまをはじめ、たくさんの方々と様々なことを経験できたおかげです。本当にお世話になりました。ありがとうございました。

本田雅幸
（生物学科）

～私にとっての4年間～

新潟大学理学部に入学し、早くも4年が過ぎました。思い返してみればいろいろなことを体験した4年間だと思います。私が大学に入って、最初に真剣になったのは部活（探検部）とアルバイトでした。時には学生の本分を犠牲にしてでも部活や友人との付き合いを優先することもありました。こんな私の学業成績はお世辞にも良いとはいえず、私にとって勉強は「卒業できればよい」といった程度の認識で、友人の助けを借りながらなんとか進級していました。

学業にはあまり関心を持てなかった私も4年になり、研究室に入って課題研究に取り組むことになりました。シロイヌナズナという小さな植物と毎日付き合ってゆくうちに,実験が楽しいと感じるようになりました。そして3年間の講義や実習が意味のあるものだったとわかり、真剣に受けてこなかったことを悔やみましたが、それからは失敗を繰り返さないようにと研究に打ち込むことができたと思います。4年にして初めて生物学を学ぶことが自分のやりたいことだと言えるようになりました。

卒業後は、新潟大学大学院自然科学研究科に進学し、引き続きシロイヌナズナの研究に取り組みます。今後は二度と後悔をしないような大学院生活を過ごし、今までの経験を大事にして成長したいと思います。最後に、ここまで私を育ててくれた家族や周りの人たちに感謝の意を伝えたいと思います。

野口　俊
（地質科学科）

～新潟大学での4年間～

私が地質学に興味を持った理由は、1995年に発生した兵庫県南部地震でした。当時、私は小学校4年生でしたが、テレビに映し出された被害の状況に衝撃を受けたのを今でも鮮明に思い出すことができます。そんな被害を生み出したのは、「地震」というものでした。

そして、地震に興味を持った私は、野外での調査ができるということで、地質科学科に入学しましたが、その約半年後、新潟県中越地震が発生したのです。実際に現地へ行き、調査をすることができました。さらに、昨年の新潟県中越沖地震でも調査をさせていただきました。これらは私にとって忘れられないものとなりました。地質科学科で学んだことを実際の調査に生かすことができたのです。さらには、地質学が社会貢献する場面にも出会えたことで、今まで学んできたことが、人のため社会のためになることに感動しました。

この2度の地震により、地質学的にも新潟が注目されるようになり、これからの新潟大学理学部地質科学科の役割が期待されます。私もこの4年間で学んだ様々な経験を活かし、社会貢献できる人間として、日々努力していきたいと思います。お世話になった先生方、友人、家族のみなさん、本当にありがとうございました。

小田切由香
（自然環境科学科）

～四年間で一番心に残ったこと～

それは先生、先輩、後輩、友達、そして自分自身と向き合うことでした。就職活動も、卒業研究も、サークルも、バイトも、自分自身が選んで進んで、そして成長していく過程でした。きっと、その中で得たことは、これからの人生に大きな影響を与えていくと思っています。そして、臼井 聡 先生他、研究室の方々へ。

私が有機ELの研究をやりたいと、突拍子もないことを言ったにも関わらず、自分の好きな研究をさせていただき、そして陰で本当に親身に支えてくださいました。この場を借りて、ありがとうございました。そして、自然環境科学科の人たちへ。自然環境科学科の人たちは、本当に心の優しい人ばかりで、何度もいろんな事に気づかされてばかりでした。いろいろありがとう。自然環境科学科は、他学科より専門性が低いと言われがちですが、卒業研究や授業を通して、自ら学べたことは多かったと思います。

最後になりましたが、大学四年間において、先生方はじめ両親や家族、様々な方に本当にお世話になりました。ありがとうございました。卒業してからも、誇りを持って頑張っていきたいと思います。

理学部C棟改修工事 決まる

残されていた理学部C棟西側部分の改修工事が、平成19年度補正予算で実施されることになりました。これによって、A1棟、C1棟の整備を除いて、一連の理学部校舎の改修が完了することになります。新築とは比ぶべくもありませんが、教育および研究施設が整備されてきたことは喜ばしいかぎりです。

1階には、理学部、工学部、農学部、自然科学研究科4部局の共同利用RI実験施設が整備され、教育・研究に活用されます。2階には、生物学科と自然環境科学科、3階には、化学科の研究室・実験室が整備されます。

改修工事は、6月に着工し、年内には竣工する予定です。数年に亘る改修工事で、学生、教職員の皆様には、ご不便をおかけして参りました。皆様のご協力に感謝いたします。

（建物委員会委員長　檀上篤徳）

4月に理学部ホームページが新しくなります

理学部ホームページ

http://www.sc.niigata-u.ac.jp

理学部ホームページは、理学部の活動内容を広く世界に紹介することを目的として、開設されています。理学部の目的、組織、教育活動、研究活動をはじめとして理学部の過去・現在そして未来に向かっての方向など、たいへん多くの内容を含んでいます。それらの中には現在の組織・教育活動・研究活動など常に最新の内容に保つ必要のあるデータもあり、それらは随時、また特に年度変わりに、更新を行っています。これらは理学部ホームページ委員会を中心として、理学部広報委員会や他の各種委員会が協力して作業を行っています。

これらの継続的日常作業の他、全体の構成、配置、表現方法などの改良、新たな掲載事項の検討など、理学部ホームページ全体の改良にも努めています。その時の基本方針は「より見やすい・より美しい・より分かりやすい」ホームページです。

一昨年春には新しい感覚での「高校生・受験生の方へ」のページが作成されました。今年度、理学部ホームページ委員会は、理学部ホームページ全体の再構成に取り組んでいます。現在作業が進められていますが、4月には理学部ホームページ全体がリニューアルされます。理学部トップページにフラッシュが使用されるなど、さらに見やすく、美しい、分かりやすいものへと変身します。どうぞご覧下さい。

これからの行事予定（平成20年度前半）

4月7日(月)	入学式
4月11日(金)	授業開始
4月19日(土)	黎明祭
8月初旬	オープンキャンパス
8月11日(月)～9月30日(火)	夏期休業
9月上旬	第3年次編入学試験